

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 7 月 14 日現在

機関番号：23601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792656

研究課題名(和文)慢性疾患をもつ子どもの家族と関わる外来看護師の教育支援ニーズに関する研究

研究課題名(英文) Educational Support Needs of Outpatient Clinic Nurses who Care for Chronically Ill Children and their Families

研究代表者

高橋 百合子(大脇百合子)(Takahashi, Yuriko)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：00438178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円、(間接経費) 270,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、慢性疾患をもつ子どもの家族と関わる小児科外来看護師の教育支援ニーズを明らかにすることを目的に、全国の地域医療支援病院で勤務する小児科外来看護師への質問紙調査を実施した。810名の外来看護師のうち、243名(回収率30%)から回答が得られた。

その結果、外来看護師は、小児科外来看護に関する教育の機会が少ない現状にあることがわかり、『疾患や病態に関する知識』、『発達や特徴に関する知識』、『社会資源や福祉サービスに関する知識』など様々な学習支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the educational support needs of outpatient clinic nurses who care for chronically ill children and their families. We conducted a questionnaire survey with pediatric outpatient clinic nurses working at community medical support hospitals throughout the country. Responses were obtained from 243 nurses (30% return rate). As a result, the nurses became aware of the reduced availability of education on pediatric outpatient nursing. It is therefore suggested that nurses require a variety of learning support based on the following: "Knowledge of illness and clinical conditions," "Knowledge of development and characteristics," and "Knowledge of social resources and social work services."

研究分野：生涯発達看護学

科研費の分科・細目：臨床看護学

キーワード：小児科外来看護師 教育支援 慢性疾患 子ども 家族

## 1. 研究開始当初の背景

医療技術の向上や医療体制を取り巻く環境の変化により、慢性疾患をもちながら地域で生活する子どもや家族が増加している。2005年には次世代育成の観点から小児慢性特定疾患治療研究事業が法制化され、また厚生労働省の健やか親子21推進事業において「長期慢性疾患児等の在宅医療体制の整備」が課題となった。さらに、2012年に慢性疾患を抱える子どもとその家族への支援の在り方に関する専門委員会が、2013年度には、都道府県を実施主体とする小児等在宅医療連携拠点事業が行われている。このように、慢性疾患をもつ子どもや家族に対し、医療制度の充実が図られるようになってきたが、退院後の家族の支援は十分であるとはいえず(社団法人 全国訪問看護事業協会, 2012)、子どもや家族の日常を支援する看護職者の役割が一層求められている。

現在、入院期間の短縮化によりさまざまな慢性疾患や医療依存度の高い子どもたちが外来でフォローされており、子どもや家族と定期的に関わる機会のある外来看護師の役割が重要である。しかし、外来看護師は数が少ないことや専任の看護師がいないことから慢性疾患をもつ子どもや家族への看護が十分に行えておらず(堀ら, 2002)、子どもの看護に必要な知識・技術が不足していると認識している看護師も多い(大脇ら, 2008)。

慢性疾患をもつ子どもや家族への看護援助に関する調査は、家族の困難や援助期待について(内ら, 2003; 扇野, 2010)、日常生活や社会資源の活用について(鈴木ら, 2005)、外来看護に対する家族の認識について(鈴木ら, 2003)など、家族のニーズに注目したものと、保健師の活動実態や認識について(湯澤ら, 2001; 大脇ら, 2009)、小児訪問看護の実態について(古田, 2008)、外来看護の実態と外来看護師の認識について(堀ら, 2002; 大脇ら, 2008)、小児慢性疾患外来における看護ケア実践のプロセスについて(別所, 2012)など、看護師の援助内容に関するものがあるが、看護職者と家族の両方を対象にした調査はほとんどみられない。

そこで、外来看護師と家族の両者に対し、関わり現状をそれぞれどのように受け止めているか等の認識について面接調査を行った結果(大脇ら, 2010)、外来看護師と家族はそれぞれよい関係ができていると捉えていたが、家族のニーズを把握し、今後を見通した看護の視点をもつ難しさや家族とのかかわりに必要な知識・技術不足などがあることがわかった。これらの結果から、さらに実際のやりとりも含めて看護師と家族の関わりの実態を明らかにする必要があることが示唆された。

また、外来看護に関する教育については、基礎教育で学ぶ機会が少なく、就職後の継続教育においても学習の機会が少ない現状がある。総合病院の外来に配置される看護師は、

小児科専任である場合もあるが、他科との兼任であることも多く、小児看護経験が少ないものも多い。そのため、慢性疾患をもつ子どもや家族との関わりに戸惑いや困難を感じているものもあり、何らかの教育支援が必要であると考えられる。

### 【引用文献】

- 内正子, 村田恵子, 小野智美他(2003): 医療的ケアを必要とする在宅療養児の家族の困難と援助期待. 日本小児看護学会誌, 12(1), 50-56.
- 扇野綾子, 中村由美子(2010): 慢性疾患患児を育てる母親の心理的ストレスおよび生活の満足感に影響を与える要因. 日本小児看護学会誌 19(1), 1-7.
- 大脇百合子, 内田雅代, 三澤史他(2008): 慢性疾患をもつ子どもの家族とのパートナーシップ形成に向けた外来看護師のかかわりに関する研究. 長野県看護大学紀要, 10, 33-45.
- 大脇百合子, 内田雅代, 竹内幸江他(2009): 慢性疾患や障がいをもつ子どもの家族とのパートナーシップ形成に向けた看護職者の関わりに関する研究 - 市町村および県・中核市保健所における保健師を対象とした調査 -. 日本小児看護学会誌, 18(3), 18-26.
- 大脇百合子, 内田雅代, 白井史他(2010): 医療的ケアを要する子どもの家族と外来看護師・専門職者とのかかわりに関する研究. 日本家族看護学会第17回学会集會講演集, 64.
- 社団法人 全国訪問看護事業協会, 平成21年度厚生労働省障害保健福祉推進事業(障害者自立支援調査研究プロジェクト), 障害児の地域生活への移行を促進するための調査研究事業報告書, 平成22年3月
- 鈴木千衣, 小原美江, 及川郁子他(2003): 外来通院する慢性疾患児の治療及び日常生活の現状と外来看護に対する家族の認識. 福島県立医科大学看護学部紀要, 5, 57-68.
- 鈴木千衣, 横山由美, 及川郁子他(2005): 慢性・長期的健康問題をもつ子どもと家族の日常生活と社会資源の活用. 福島県内在住者を対象として. 福島県立医科大学看護学部紀要, 7, 13-24.
- 古田聡美(2008)訪問看護ステーションにおける小児訪問看護の実際と問題点. 日本看護学会論文集 小児看護, 38, 95-97.
- 別所史子, 田崎あゆみ, 山田晃子, 上本野唱子(2012): 小児慢性疾患外来における看護ケア実践プロセスと外来看護の専門性, 小児看護, 35(3): 375-379, 2012
- 堀妙子, 関恭子, 奈良間美保(2002): 医療的処置を行っている小児が通院している外来看護の実態と看護師の意識に関する調査. 日本小児看護学会誌, 11(2), 28-33.
- 湯澤布矢子, 斎藤泰子, 高橋香子ら(2001): 小児保健医療における保健婦(士)活動に関する研究(第2報). 宮城大学看護学部紀要, 4(1), 10-19.

## 2. 研究の目的

本研究は、小児科外来看護師への具体的な教育支援方法を構築することを目指し、外来看護師が慢性疾患をもつ子どもの家族に行っているケアの実態と認識、家族に関わる際に難しいと感じる内容とその時の対処方法、家族に関わる際に必要だと感じる知識や技術等の教育支援ニーズを明らかにすること

を目的とするものである。

### 3. 研究の方法

平成 23 年度

#### 1) 参加観察および面接調査に関する準備

##### (1) 文献検討

慢性疾患をもつ子どもや家族にかかわる看護職者に関する文献、外来看護師への継続教育に関する国内外の文献、参加観察による調査に関する文献検討を行い、研究方法を検討した。

##### (2) 国内の看護教育に関する情報収集

国内学会に参加し、慢性疾患の子どもや家族に関する看護研究活動をしている、他大学の看護教員や看護職者らと情報交換を行い、研究の動向について情報収集した。

#### 2) 小児科外来看護師の援助場面の観察と認識の調査

##### (1) 調査の実際

小児科外来看護師が、慢性疾患をもつ子どもの家族に行っているケアの実態と認識を把握するために、日ごろ実習指導で交流のある県内総合病院小児科外来にて参加観察と面接調査を行った。はじめに、調査協力の得られた看護師・家族の援助場面の参加観察を行い、やり取りの実際と気になった場面についてフィールドノートに記載をした。許可を得てICレコーダーにてやり取りを録音し、研究者が気になった場面について、看護師と家族にその場面で考えたことや感じたこと等、認識に関する面接調査を行った。この予備調査をもとに、平成 25 年度の質問紙調査の内容を検討した。本調査は、長野県看護大学倫理委員会の承認を受けて実施した。

##### (2) データ分析

分析の妥当性を得るため、本学の研究者に協力を得て行った。

平成 24 年度は研究を中断。

平成 25 年度

#### 1) 質問紙調査の実施

##### (1) 調査対象者

全国の地域医療支援病院 340 施設のうち、小児科のある施設 270 施設（小児専門病院は除く）で勤務する小児科外来看護師 816 名である（各施設 3 名）。文書により本研究について説明し、協力の同意が得られたものを対象とした。

##### (2) データ収集方法

自作の自記式質問紙調査

##### (3) 調査内容

平成 23 年度に行った文献検討と面接調査を基に外来看護師の教育支援ニーズに関する質問紙を作成した。質問内容は以下のとおりである。

・慢性疾患を持つ子どもの家族へ行っているケアの内容と、実施の頻度、重要性について

・看護師が家族との関わりが難しいと感じる理由、対処方法、子どもの疾患、または関わりが難しいと感じない理由について

・看護師が家族との関わりで必要だと感じる知識や技術について

・小児科外来看護に関する学習の機会の有無とその内容、学習機会のニーズについて

・教育支援として必要だと思うことについて

・対象者の属性

質問紙の内容については、共同研究者間で協議しながら検討し、数名に対してプレテストを行ない、修正を行った。

##### (4) 調査手順

全国の地域支援病院のうち小児科外来のある 270 施設の看護部長宛に、以下の ~ の文書を郵送した。看護部長宛の依頼文書、外来看護師長宛の依頼文書、外来看護師宛の依頼文書、質問紙、返信用封筒。

まず、看護部長に依頼文書にて調査への協力と外来看護師長への依頼文書を渡してもらった。外来看護師へは、外来看護師長を通じて依頼文書と質問紙を配布してもらった。質問紙は無記名とし、回答記入後、回答者が個々の返信用封筒に入れて研究者へ返送してもらうようにした。質問紙の返送をもって、参加者の調査協力への同意を得たとみなした。本調査は、長野県看護大学倫理委員会の承認を受けて実施した。

### 4. 研究成果

#### 【小児科外来看護師の援助場面の観察と認識の調査】

平成 24 年 1 月から 3 月に、地域医療支援病院である A 総合病院小児科外来にて慢性疾患の子どもの受診時に同意を得てリハビリ、問診、診察、処置場面の見学をし、家族と看護師それぞれの認識について面接調査を行った。倫理的配慮として、対象者には研究目的や調査方法などを記載した依頼文書を用いて説明し、研究協力の同意を得た。データを逐語録にし、内容を分析した。

子どもの外来通院時に付き添いをしている母親 4 名と、外来看護師 3 名に、それぞれ 1 回（60 分から 100 分）の半構成的面接を行った。子どもの疾患は、てんかん、21 トリソミー、水頭症・二分脊椎、脳室周囲白質軟化症であった。

母親の語りをまとめた結果、母親は看護師から声をかけてもらえることや、待ち時間への配慮、子どもの体調を気にかけてくれる対応が嬉しいと感じていた。一方、看護師に相談しようと思わない、看護師の多忙な様子から相談しにくいと認識している人もおり、困ったことは主治医に伝えていた。また、子どもの経過をわかってきている担当看護師がいるとよい、看護師から子どもの発達について実際の例を示して教えて欲しいという要望が聞かれた。

看護師の語りをまとめた結果、看護師は問診や処置時に意識して声をかけ子どもや家

族の状況を捉えるようにすることや、家族の気持ちをくみ取った声かけを工夫していることがわかった。しかし、子どもの疾患や経過、リハビリの状況、家での生活の様子などがわからず、家族への関わりが難しいと感じている看護師もいた。これらの背景には、急性期疾患への対応が優先される外来の現状や電話対応の多さ、看護師数の不足等の体制の問題に加え、看護師自身の情報把握不足による自信のなさや重症で専門的な対応を必要とする外来看護への戸惑いなどが影響していると考えられ、看護師への専門的な知識の提供等、具体的な教育支援を行う必要性が示唆された。

これらの結果を分析し、平成 25 年度に行う質問紙調査の内容を検討した。

#### 【小児科外来看護師の教育支援ニーズに関する質問紙調査】

平成 25 年 9 月から 11 月に、全国の小児科のある地域医療支援病院 270 施設（小児専門病院は除く）で勤務する、慢性疾患をもつ子どもや家族と関わっている各施設 3 名、計 810 名の小児科外来看護師を対象に、自記式質問紙調査を行った。看護師 257 名から回答が得られ、そのうち有効回答数は 243 名（30%）であった。

##### 1) 看護師の属性

年齢は 25 歳未満から 60 歳以上までおり、そのうち 30 歳以上から 40 歳未満、40 歳以上から 50 歳未満の看護師が多かった。職位はスタッフが 204 名（84.0%）、主任が 28 名（11.5%）、外来責任者が 9 名（3.7%）で、勤務形態は常勤 152 名（62.6%）、非常勤 87 名（35.8%）であった。所属は外来のみが 206 名（84.8%）、外来と病棟が 30 名（12.3%）、小児科専任の有無では、小児科専任が 120 名（49.4%）、他科との兼任が 95 名（39.1%）であった。看護師経験年数について、10 年以上が 192 名（79.0%）と最も多く、小児看護経験年数および外来看護経験年数は、5 年以上 10 年未満が多かった。小児科外来経験年数は、1 年以上 3 年未満が 66 名（27.2%）と最も多く、1 年未満の看護師も 48 名（19.8%）であった。外来プライマリー制度の有無については、プライマリー制度がある 10 名（4.1%）、一の患者にプライマリー制度がある 32 名（13.1%）、プライマリー制度がない 191 名（78.6%）であった。

2) 慢性疾患をもつ子どもの家族のケアについて（以下、項目を『 』、項目の程度を「 」と自由記述を と表記する）

（1）実施の頻度：「いつも行う」と回答した項目で多かったのは、『子どもに話しかける』183 名（75.3%）、『子どもにねぎらいや励ましの言葉をかける』165 名（67.9%）、『現在の子どもについて確認する』158 名（65.0%）であった。「行っていない」と回答した項目で多かったのは、『家族も含めたケア会議を行う』155 名（63.8%）、『学

校との調整を行う』140 名（57.6%）、『他職種とのカンファレンスの機会を持つ』123 名（50.6%）であった。

（2）重要性について：「重要である」との回答した項目で多かったのは、『現在の子どもについて確認する』218 名（89.7%）、『子どもの疾患・病態を把握する』212 名（87.2%）、『子どもの経過を把握する』211 名（86.8%）であった。

3) 慢性疾患をもつ子どもの家族への関わり

の難しさについて  
難しいと感じることが『ある』と回答したのは 235 名（96.7%）で、その理由として、『急性期疾患の患者対応に追われる』142 名（58.4%）、『外来看護師の人数が不足している』142 名（58.4%）、『処置や検査が多い』128 名（52.7%）、『診察介助に入れず、様子が分からない』106 名（43.6%）などがあげられた。対応方法として、タイミングを見て話をする、他科より応援を頼むといった内容があげられた。関わりが難しいと感じる子どもの疾患としては、『発達障がい』160 名（65.8%）、『神経・筋疾患』124 名（51.0%）が多かった。

4) 外来看護における教育支援ニーズについて

子どもの家族と関わる際に必要と感じる知識や技術として、『子どもの疾患や病態に関する知識』220 名（90.5%）、『子どもの発達や特徴に関する知識』186 名（76.5%）、『社会資源や福祉サービスに関する知識』177 名（72.8%）、『小児看護全般の知識』167 名（68.7%）、『子どもの経過を理解するための知識・技術』151 名（62.1%）など、多様な教育支援を求めている。小児科外来看護に関する学習の機会としては、『書籍等で自己学習』102 名（42.0%）、『子どもや家族との実際の関わりから』94 名（38.7%）と、自己学習や経験の中から学びを得ている傾向がみられた。また、学習の機会として必要だと思う内容については、『院外の研修会』152 名（62.6%）、『学術集会等での講演やシンポジウム』133 名（54.7%）、『子どもや家族との実際の関わりから』117 名（48.1%）、『外来独自の勉強会』116 名（47.7%）などであった。

外来看護師は、急性期疾患患者の対応や処置や検査に追われ、慢性疾患をもつ子ども家族と関わりが持ちにくい現状が伺われた。また、小児科外来看護に関する学習の機会は、個人に委ねられている傾向があり、院外の研修会や講演会での学習など、多様な教育支援ニーズがあることがわかった。

以上の結果から、外来看護師が慢性疾患をもつ子どもの家族に行っているケアの実態と認識、家族に関わる際に難しいと感じる内容とその時の対処方法、家族に関わる際に必要だと感じる知識や技術等の教育支援ニーズの内容が明らかになった。今後は、このような支援ニーズに対する取り組みが求めら

れており，外来看護師の具体的な援助内容や工夫，他職種との連携方法について調査をする必要があると考えられる．

#### 5．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

高橋百合子，内田雅代：慢性疾患をもつ子どもの家族と小児科外来看護師のかかわりに関する研究 - 外来受診時の家族および看護師の認識 - ．第 60 回日本小児保健協会学術集会講演集，2013.9.28，東京都．

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

#### 6．研究組織

(1)研究代表者

高橋 百合子

（長野県看護大学・看護学部・助教）

研究者番号：00438178